

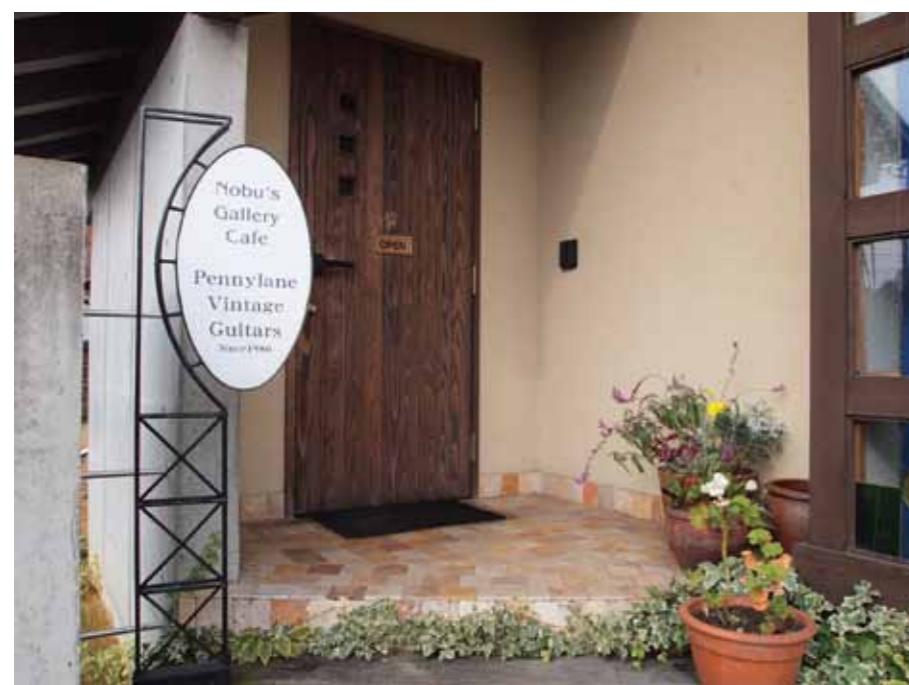
—いつかギャラリーをやろう、やってみたいと以前から思っていたのではないですか。

宇津 全然なかったです。ここに来るのがきっかけだったんです。だから本当だったら、どこかのギャラリーで、二年でも三年でも勉強してからって思うんですけど。美術が好きっていうだけではできないことだったんだなあって、始めてから分かったから(笑)。

いろんなギャラリーに行っては、概要とか規約みたいなものをもらってきて、それを読んで、こういうふうになってるんだ、だいたい決まってることがあるんだなあって分かったんですよね。あと友達に作家さんがいたので、そのひとに、ギャラリーはどんなふうにしたらいいのかを聞いたりしました。

—ここを利用される方は、どのような方が多いですか。

宇津 作家さんももちろんいますけど、女の方、主婦の方が多いですね。わたし最近思うんですけど、主婦は馬鹿にできないな、と。



● <左写真>Nobu's Gallery & Café 入口

去年ここでやった方は、お洋服を作ってるんですけど、すごく熱心なんですね。例えばすてきなお洋服があったとするでしょう、それが何万円でもそのひとは買うんです。そしてそれをほどく。どんなふうに作ってあるのか見て、同じものを作つてみる。わたし感心させられますが、あいう方には。苦労しながら努力してんじゃないんですよ、好きだからどんどんやるの。それがね、すばらしいと思う。

—探究心がすごい。そういう方がいらっしゃるんですね。

宇津 いますね。だから絶対主婦はあなどれないと思います。子供を育てながらこつこつやってるひともいます。だからわたしそういうひとにやってもらいたいと思うの。最初は、いつも布系とか織物系には来るんですね。だからそういう方を、わたしがその都度選ぶんです。このひとだったら来るかなあと。それでDMを出します。そうするとかなりのひとが来てくれますよ。でも外れることもあるんですね。来ないなあと思うときもあるんですけど(笑)。それから新聞にも出しますし、他のギャラリーにDMを置いてもらったりもしますし、それを見て来る方もいます。やっぱり、みなさんに来ていただく努力もしなくちゃいけないと思うんですよ。ただやってても来ませんよね。

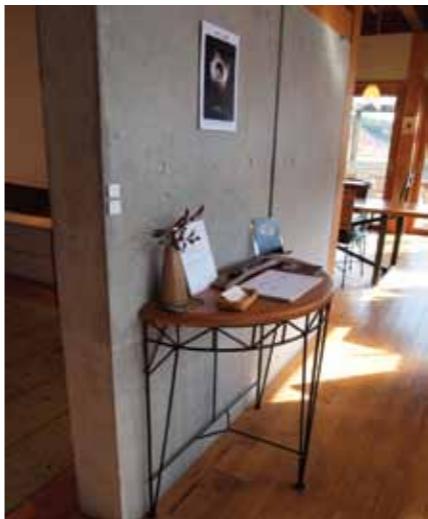
それで、お客様が来て買う。買うっていう行為がすごいと思うんですよ。ただ作ったって、どこにでもあるものだったら買ってもらえないと思うんです。でもすてきだわって買うお客様がいるっていうことが、ギャラリーが成り立つていうことなんですね。だからそういうひとを見つけていかなきゃいけないと思うんです。

—お客様は、どこから情報を得てここへ来られるでしょうね。

宇津 わたしは、うちに来たお客様にはなるべく芳名帳に書いていただいて、名簿にするんです。例えば布系のときに来た方って、いつも布系とか織物系には来るんですね。だからそういう方を、わたしがその都度選ぶんです。このひとだったら来るかなあと。それでDMを出します。そうするとかなりのひとが来てくれますよ。でも外れることもあるんですね。来ないなあと思うときもあるんですけど(笑)。それから新聞にも出しますし、他のギャラリーにDMを置いてもらったりもしますし、それを見て来る方もいます。やっぱり、みなさんに来ていただく努力もしなくちゃいけないと思うんですよ。ただやってても来ませんよね。

—企画展もされていらっしゃるそうですね。

宇津もちろん、年に二三回はうちの全面企画でやりますけれども、それはわたしが作家さんに直接お願いにいって、やつていただきます。最初はどきどきしながら行きまして、今も最初にお会いするときはどきどきしますけど、あんたのギャラリーなんかじゃやらないよ、とか言われちゃうかも知れないと思いながら(笑)。



● 芳名帳など置いてあるテーブル



● ギャラリー内部

—それでもギャラリーを続けるのはやっぱり自分の好きな作家さん、すばらしい作家さんにやってもらいたいっていう。

宇津 そう。自分の好きな方にやってもらって、それを成功させる。お客様に来てもらって、お客様に楽しんでもらう。それである程度売り上げも上げることができる。それがわたしの目標なんですね。

—お話を聞いて、銀座などのギャラリーとはちがった Nobu's Gallery の特色があるのだと思いました。

宇津 そうなんです。ここに東京と同じものをもってきたとしても、それは不可能なわけですから。自分がここでギャラリーをやるっていうことはどういうことなのか、やっぱり一年二年やっていくうちに、ひとが何と言っても、自分のポリシーを曲げないっていうことが大事なのかなあと思いましたね。

—

—過去にはどういう企画展をやったんですか?

宇津 うちの夫のギターのお客さんに、このギャラリーでやってもらうっていう企画をしたことがあるんです。「ギターに魂を貫かれた男たちの仕事展」っていうんですけど。そのときは、ギター好きのお客さんで、あまり美術に興味のないひとも見に来ましたね。

—おもしろい! それは Nobu's Gallery でしかできないことですね。

宇津 それは楽しかったですね、けっこう。全面企画ですから、写真もうちで撮りますし、DMもうちで作りますし、全部うちでやります。だから賭けみたいなものですよね。でもまあいいんです、それは自分でいいと思ってやるんだから、覚悟してやるんですけども。でもお客様はけっこう来てくれます。うちで全面企画したもので、失敗したのってあんまりないです。

—貸しギャラリーだからって、ただ場所をお貸しします、というわけではないんですね。お仕事もたくさんあって大変ではないですか。

宇津 でもギャラリーでひとを雇うっていうのは本当に大変だと思いますよ。自分でこれから始めようっていうひとは、ひとを使わず自分でやる努力をしないと、やっていけないと思いますね。考えてみれば、始めて一、二年のときには、すごく怖くなかったの。ギャラリーのノウハウも、芸術とは何かということも分からぬのに、わたしがとんでもないことを始めちゃったって。やってもらっても、どうしよう失敗したら、とかね。

—そうですね、自分ひとりでやるわけじゃないですから。作家さんのためにお客様を呼ばなきゃいけないし。

宇津 そうです。自分さえよければいいってわけじゃないじゃないですか。作家さんはそれで食べてるひともいるじゃないかって思ったら、少しどきどきしてきちゃったの。

だから本当にギャラリーは儲からない仕事です(笑)。資本のあるひとだったらやっていけるかもしれないけど、それでなんとか生計を立てていこうっていうひとには、ちょっと無理だと思いますね。うちは幸い夫のギター工房がメインですから。でもここに来たときうちの夫に、自分の食い扶持は自分で稼げって言われたんですよね(笑)。だからわたしは今までしていたパートの収入分くらいは自分で稼がなくちゃいけない、というのはあったんですけど。

● 宇津伸さん

